



Title	N. Sarraute, 《Le Planétarium》の構造と会話
Author(s)	赤木, 富美子
Citation	études françaises. 1978, 16, p. 65-82
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/93650">https://hdl.handle.net/11094/93650</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## N. Sarraute, 《Le Planétarium》の構造と会話

赤 木 富 美 子

### はじめに

この小論は、Nathalie Sarraute の小説、*Le Planétarium* を材料に、作品全体がどんな構想によって組立てられているのか、どんな図式のもとに展開するのかを調べたものである。それは先ず形の研究なのであるが、できれば、われわれは、その形が、どんな思考に対応するものかを考察したいと考える。文学作品の内容だけの研究、形式だけの研究は多いが<sup>(1)</sup>、両者の間に何らかの関連を見出し得たものは余りない。H. Lefebvre は、古典主義の厳密な形式と、17世紀社会の秩序の重さとの間に1つの照応を見出した<sup>(2)</sup>。方法が明確でなく結論は独断的であったが、意図は興味深いものである。われわれは問題を小さく限ることによって、自ら証明できる範囲で、この問を提出してみたいのである。

ところでこの小説は、筋といっても「ギミエ若夫婦が、伯母の住居を手に入れるかどうか、妻ジゼルの母のおしつけようとしている皮張り椅子で我慢するか、それとも欲しがっていたルイ15世風の安楽椅子を買うか」といった微小なものに縮小されることを、Newman は指摘している。<sup>(3)</sup>ただ人間の会話という観点から見直してみると、そこには意外に複雑な構成が見出されるように思えるので、まずその点を明らかにしてゆきたい。

### 1

最初に、ごく簡略化して、小説の各章の主な対話者とその話題の主なものを、追ってみる。

表I

	対話者	話題が明らかにすること
1章	ベルト伯母：職人	ベルト伯母がその住居の扉をつけかえたが、家具屋の手違いで安物のクロームの把手をつけられてしまう。
2章	アラン：ジゼルの父 母、客たち	その甥アラン1章の事件を笑い話にして語る
3章	ジゼルの母：アラン 夫妻	アランの妻ジゼルの母、儉約的皮張り椅子をすすめる。
4章	ジゼルの母：アラン ジゼル	ジゼルの母、ぜいたく品を好むアランの性格への危惧をジゼルにたきつける。ジゼルも夫の俗物批判に不安になり、母のすすめを受け入れようとアランに提案、アラン怒って外出
5章	アラン：ジェルメーヌ・ルメール	憧れの女流作家に電話したアランは思いがけず会見を許される。彼は椅子の話と、ベルト伯母が住居を交換しようと申出ていることを物語る。
6章	アラン：ジゼル	ジェルメーヌ・ルメールのアランに対する評価を2人で推測。
7章	アラン：ジゼルの父 ジゼル：母	ジェルメーヌ・ルメールについてジゼル父と争論、ベルト伯母の住居交換の申出が話され、父が家主と知合であることが判る。
8章	アラン：ジゼル	こっそり伯母の住居を見にゆき、「老人を追出す」決意。
9章	ジゼル：アランの父	アランの父から姉ベルトに話してもらうよう依頼に来たジゼルのたのみを父承諾。
10章	アラン：ジェルメーヌ・ルメール アランの父	女流作家に紹介された父は皮肉な態度をとり、女史は心を傷けられた様子。
11章	アランの父：ベルト	父はアランの頼みをベルト伯母に伝えるが、伯母は住居交換は不可能だと断る。
12章	アラン：知人	ジェルメーヌ・ルメールの取巻きの1人に会ったアランは女史が怒っていないことを知る。
13章	ジェルメーヌ・ルメール：取巻 ヌ・ルメール：連中	アランが自分のことを気にしていると知った女史はアラン訪問を提案。
14章	アラン：客たち	不意の訪問にアランはあわててもてなす。窓に背をむけて仕事をする話、近く転居する予定など。
15章	ベルト：アランの父	11章と同じ対話を伯母の側から再現。
16章	アラン：ベルト	アランの直接交渉、伯母の拒否に会ったアランは、家主にたのんで伯母を追出すと宣言。
17章	フェルデ：客たち イナンド	その後のアランと伯母の噂話。
18章	ベルト：アランの父	ノイローゼになったベルト伯母を弟が訪ね、安心させる。伯母はかえって住居をゆずる決意をする。
19章	アランの父：ベルト	前章がアランの父の立場で再現される。

20章	アラン：教授	教授からジェルメーヌ・ルメールにする低い評価をきき、アラン動揺する。
21章	アラ：ジェルメーヌ・ルメール	伯母の住居を手に入れたアランをジェルメーヌ・ルメールが訪問。美と人間に対する評価のくい違い。

以上の如く、この小説で1つ明らかなことは、読者に向って発せられる指標の殆んどが、会話で与えられているということである。サロートの作品においては、会話にも、その形式と内容に、いろいろの種類がある。《 》、または、——で現わされるような、人間の声となって発せられるもの、そういう声になる前の心の中で形をつくるもの<sup>(4)</sup>、形になるかならぬかの内心の動きなど<sup>(5)</sup>。しかし、とに角、人間が他の人間を前にして、形成する(口にする、または心に起ってくる)言葉によって、物語がすすめられてゆく。

扉を前にして、ひとり想いに耽ける、1章のベルト伯母と、アランの脅迫を受けて、世界から追出される幻想に脅える18章のベルト伯母を除いて各章は必ず、誰かと誰かの出会いの場である。唯ひとり、林の小径を散歩する主人公の描写などはない。

5章のはじめで、アランがひとりでカフェにいるとしても、それは、ジェルメーヌ・ルメールに会いにゆくためであり、まさしくその次の、懂がれの人との初対面の対話を準備する時間と空間を構成している。11章のはじめで、アランの父が、ひとり服装を整えて出かけてゆくとしても、それはまさしく、ベルト伯母との、心の重い会見を行うためである。

以上あげた2例は、重要な会見を前にしての、人物の例であるが、会見の後にも人物は相手の言った言葉、自分の言った言葉を反芻<sup>すう</sup>し、解釈し、距離をはかり、言葉を試験管に入れたように分析する。10章の大部分は、アランが、父と共にジェルメーヌ・ルメールに出会った時の、起り得たかも知れない対話の想像(P. 121—123)と、実際に起った対話の分析(P. 123—127)更に、それ以前の、画廊での、ジェルメール・ルメールとの対話の追憶(P. 127—133)にあてられている。

このような現象は、いわゆる Hypersensible<sup>(6)</sup> と言われる作中人物だけにおこるのではない。この小説では、俗物中の俗物であるジゼルの母でさえも、アランの言った言葉を反芻し、これから言われるであろう言葉を予感する。(3章)

これらの例だけでも、この小説が会話という観点から見ると、いかに複雑な構成を与えられているかということが予想されるが、先ず最も単純な、会話の機能から順を追って検討しよう。

小説に、ある人物が現われる時、従来の小説では、作者によって、(他の作中人物の目を通すとしても)、その人物が描写され、その性格が紹介される。ところがこの小説では、このような人物描写は、殆んど皆無であり、その人物が話している時の動きを描写し、話し相手の受取る印象を伝えるというのが関の山である。一番印象を与えるベルト伯母の、鼻をひくつかせる癖は、彼女がものを言う時の癖であり、話相手が一番気付きやすい癖である。「老女は、動く鼻先をひくつかせて。」(P.72)「彼女は、鼻の先を動かして、かすかにくんくん云った。《はい、…》」(P.143)。

この小説では、ある人物の外見や性格の紹介は、まず作中人物の声に出た会話で行われる。例えば2章はじめに登場する女性は、《マドレーヌは馬鹿だ》(P.31)という人々の評価によって現わされる。それ以外、どこにも、名も外見も示されない。(この人物が、ジゼルの母なのか別の女性なのか、研究者の間で意見が分かれている。)<sup>(7)</sup> また、別の人物についての会話「あの女は厚顔ましい」も同様で、このように、ひと言で人間にレッテルを貼るような《 》つきの言葉で、読者に示されるのである。

われわれは、だからある人物の性格 外見さえ正確に知る手段を持たない。その人物が 他の人物にとって、どういう風に見られているかということしかわからないのである。それは、独断的で 偏見にみちているといえるだろう。しかも その意見さえ、その時そういう風に語られたという保証しかない。人の評価というものは、その人物との関係によって、さま

ざまに変化するからである。

例えば、ベルト伯母を規定する会話をあげてみよう。《ただの偏執狂だよ、それだけのことさ。》(ジゼルの父が言う。2章P.27)。《本当の苦しみを数々知った女性です》(アランが義父の言葉に対抗して言う。同P.28)。《彼女は全くエゴイストなんだから》(同じアランがジゼルに言う。)8章P.110)

同じことが女流作家ジェルメーヌ・ルメールについて、もっとはっきりと現われている。彼女は、アランの崇拝者たちの目には、《そんなことは絶対ない。ジェルメーヌ・ルメールはとっても美人だ。そうとも》(5章P.78)。《彼女は美しい》(同P.78)。《あの人は、偉大ないい女だ、ジェルメーヌ・ルメールは、》(12章P.153)なのであるが、義父にとっては、《わたしは彼女をかなり近くから見たがね、お前のジェルメーヌ・ルメールを。蚤みみたいに醜くかったよ。誰にも明らかなことさ》(7章P.102)なのである。ジゼルの言うところでは、《もう1つの美の理想というものがあって、ジェルメーヌ・ルメールはそれにぴったり》(同P.102)なのである。が彼女はジェルメーヌ・ルメールを見たことがない。所詮人間の評価があやふやな上に、言葉はその時のゆきがかかりに左右されて、話者の本当の評価さえ、そのままに現わさない。

2章で、アランは、ベルト伯母の性格を語った後、《でも僕は、人々の間に、根本的な違いがあると、どうしても信じられないんです。どこか、もっと遠くの、奥底では、誰もみな同じようで、誰もみな、互に似かよっている。だから、とても批判などできませんよ。ひと皮むけば、皆と同じだとすぐ感じますから》(P.29)と言っているが、作品の構造もそれを基盤としているといえる。人間が人間を評価することはできない。それは常に、人と人との関係によって変るし、ある関係のなかでは、1人の人間も、まったく別な姿を見せるのである。美術品のような家具に執着する偏執狂とみられているベルト伯母も、久しぶりに弟を迎えた瞬間、すべてを捨てて、

喜びにひたることも可能なのである。「誠意にあふれ、純粹で、心寛く、愛と忘我のひとつときにすべてを忘れることのできる女。」(11章P. 141)。

人間に個有の性格などない。人間の1つ1つの反応を規定するのは、その時々との関係である。刻々に変化する星座のように、片時もとまらない関係の変化によって、映し出される、ゆらめく影のような人物の姿こそ、この小説のもっとも興味ある観物だろう。

では読者は、どのようにして、この移り動く関係の変化のさまに立会うのだろうか。ここにこの小説の構成の巧みさが存在するように思われる。

さまざまに変る対話者たちの、内心と外側の話題のなかで、刻々に動く人物の関係を捉えさせるために、この小説はどんな構成をとっているだろうか。それを解明するために、主要な2つの話題をとりあげ、どのようなことをどのような順で、読者に伝えてゆくかを見てゆきたい。2つの話題をえらんだのは、現われる頻度が最も高く、従来の伝統的小説の読み方をすれば、おそらく中心テーマと見られる筈のものを取りあげただけである。(表I参照)

その1)は、ベルト伯母が、自分の広い住居を、アラン若夫婦にゆずってくれるかどうかという話。

その2)は、アランと、その憧れの女流作家ジェルメーヌ・ルメールの話である。

ベルト伯母の住居の場合、最初、いったいどういう事情で、どういう言葉で、このことが提案されたのか不明のまま、話が進んでゆく。全く思いがけない提案だからでもある。

まず、5章で、アランが、大人たちに甘やかされ、捉えられていると感じる原因の1つとして、このことは姿を現わす。ベルトの方の言葉はなくその返事だけが存在している。《そんな、伯母さん。僕たちのために、ほんとにそんなことしてくれるの?》(P. 72)

次は、アランが、赤の他人のジェルメーヌ・ルメールに語る話の中に、伯母の言葉として出てくる。《あんたたちのところ、ほんとに小さいのね。一杯ね、…そう言って彼女一寸面白がったんです。…ずい分気をひかれることですがね。私の住居、ねェ、あんた方には、恰度いいわ。——僕たちは、自分の耳が信じられませんでした》(P. 87)

7章では、妻のジゼルが、自分の両親にこのことを告げる。《お報らせするのに凄いいことがあるのよ。ベルト伯母さんの住居を私たち多分手に入れることになりそうなの》(P. 105)。父の反応は、《ベルト伯母さんだっ  
て？ あの気狂い婆さん、お前たちからかわれているのがわからんのか》  
であり、母の反応は、《ベルトはとってもアランを愛しているわ。この子たち2人のためにはとてもいいことじゃない》(P. 106)である。そして、やはり会話で、もし伯母が冗談であったとしても、本当にゆずらせる方法が思案され、ジゼルの父が、その持主を知っていることが明らかになる。《無論、それなら知っている、Prioulet だ》(7章P. 106)

実際に言われた伯母の言葉をBとすると、これらはいずれも、利益をうける側からの証言であり、最初のアランの心の中の会話では、伯母の言葉の形さえない点で、最低の段階にあるとしなければならない。この話は5段階に分けられるので、仮にB-5(マイナス5)とすることができる。

次の、アランのジェルメーヌ・ルメールに語る言葉の中では、アランによって報告された伯母の言葉が現われ、1歩近ずいた点で、1段階あげてB-4としよう。7章のジゼルの話は、アランと同じレベルだから、同じくB-4でしかない。

しかし9章で、ジゼルがアランの父を訪問し、事情を話すところでは、《ほんとなんですのよ。あの方自身がいらして、私たちにそのことをお話しになったんですわ》(P.115)と、やや詳しくなっているので、更に1段階あがって、B-3とすることができる。伯母の提案の言葉と、そのいきさつへと糸を辿ってゆくと、その次は11章、アランの父の想像に近い地の

文の中に、伯母の言葉が出てくる。《だけど、ほんとにお前たちのおうち、小さいわね。恰度いいのは、うちみたいなのだわね》(P. 138) 更に、アランの父が、姉のベルト伯母のところへ、住居交換の話をしに行って、《住居をあの子たちにゆずると、あんたが提案したらしいね》(P. 142) というので、読者は、やはり伯母が申し出たという事実はあったらしいと思うがそのいきさつは不明である。9章のジゼルから1歩も進んでいないが、繰返されて確かさを増した点で、B-2というべきであろう。

その答として、ベルト自身が、《ええ、私がそう云ったのはわかっています。…あの子たちのところは、ほんとに小さく思えたし、私のところは、まったく広すぎますものね》(11章P. 143) と答え、彼女が言ったということは確になる。だが彼女に交換の意志はなく、嫁の両親にあてつけて言ったことが、彼女の言葉でわかる。B-1に辿りついたと言えよう。

やがて、15章で住居を追い出されようとしているベルト伯母の心の中に「あの愚かしいことを言った時」のことが追憶され、自分の言った言葉と、そのいきさつが蘇ってくる。「ほんとに小さかったのだ、あの子たちのところは。…それで、気が大きくなってしまったのだ。時々おこることだが妖精のまねをしたい気になってしまっ…この年になってもまだ直らない何もかも風まかせに、解き放たれ、自由にしたい気持ちに。…一寸の間、軽い若返った感じだった…それに、何故いけないことがあろうか《もちろんよ、あんたたち。馬鹿げてないわよ。ほんとよ。ほんとよ。》彼女は夢中になり、相手は呆れ返っていた。…だが怖い。ふいに何か怖い気がする。」(P. 179)

このように、住居をゆずる申出というこのテーマは、言われた時間から逆に、種々の人物の話題になって、全体の輪郭が、映し出されてくるという構成をもっている。いわば会話の河を溯りながら、われわれは、その言葉に逢着するのである。

これに反して、この提案が、結果をひき起し、アランの欲望をかき立て

ついに住居を手に入れるまでの経過は、一見、順を追って辿ることが出来る。(表 I 参照)

だが、順を追って進んでゆくこの経過は、実は重要な意味を持っていない。そもそも、伯母が住居をゆずるかどうかが大した問題ではないからである。その裏にかくされてはいるが、先の、B-5→B、へと辿るのとおなじ構成で、アランと伯母の関係がどんどんあばかれてゆくのである。むしろアランと伯母を取巻く人間同志の関係といった方が正確なのであるが単純化するために、アランと伯母に中心をしぼって図式化してみる。

表 II

2章	アラン=ベルト。人生の悦楽、美に対する共通の嗜好、2人にとっての共通の基盤の意識	X-5
3章	この類似関係は、第3者によっても認められている。(ジゼルと母の会話)	X-5
5章	アランはまだ伯母の申出に甘える気はないが、広い方がよいというジェルメーン・ルメールの意見が介入する。	X-4
7章	妻の両親の介入(ジゼルと父母のアランの前での会話)	X-4
8章	アランの躊躇と結論(老人をむしろう)	X-3
11章	アランの父 sous conversation <sup>(5)</sup> で、幼時のアランと伯母の関係叙述。ベルト伯母の拒否。ジゼルとその両親への敵意。伯母の sous conversation <sup>(5)</sup> で幼時のアランとの関係叙述。	X-2
14章	狭い家になだれこんだジェルメーン・ルメールと取巻きの介入。アラン引越を予告。	X-2
15章	弟を敵方(アラン、ジゼルとその両親)の使として意識するベルト。	X-1
16章	アランとベルトの対決。	X
17章	アランの残酷な仕打。明るみに出たアランと伯母の噂。	X+1
18章	ノイローゼのベルト伯母、その譲歩、幼時のアランとベルトの関係のくり返し。	X+2

こうして読者は、やさしい言葉のかげにかくれたアランの、欲しいものに対する食欲な動きと、そのための1つの道具に化した伯母との怖い人間関係を、白日のもとに見るのである。ベルト伯母の譲歩によって、それ

はまた表面的な親愛な言葉の交される関係のなかに、組みこまれたが、その重い実態が変わったわけではない。というより、その実態は、輪郭をつねにたゆとう後光のように変化させ、よくは捉えられないものである。Xは確に存在するのだが、それがどんなものか、別の言葉で定義することはできない。われわれはさまざまな言葉がゆきかう中で、それがだんだん姿を現わしてくる恐怖に立会うだけである。

同様な図式を、もう1つの主要な関係である、アランとジェルメーヌ・ルメールにもあてはめることができる。

表Ⅲ

5章	憧れの女流作家との思いがけぬ会見を許されたアランの見たジェルメーヌ・ルメールは、幻影につままれ、対話における両者の差はまさに巨大化している。何故かジェルメーヌ・ルメールは愛想よくアランの才能を迎える《頑張ってるね、あてにしていますわ》(p. 89) 伯母の申出に甘えるべきだと言う彼女にアランはからかわれたとさえ思う。現実から程遠い。	X-10
6章	妻ジゼルによるジェルメーヌ・ルメールの態度の分析、ジェルメーヌは、アランをからかったのではなく、その純粋さを面白がったのだろうと結論。	X-9
7章	ジェルメーヌ・ルメールの取巻きになれたことを自慢する妻ジゼル、関係の変化はない。妻の父の反対意見の介入はあるがアラン取合わない。	X-9
10章	アラン自分の父と共にジェルメーヌ・ルメールに出会う。アランの希んだ空想の対話と、実際の対話との大きな差から、ジェルメーヌ・ルメールの像はやゝ明らかになる。彼女自身が、下落を意識する。	X-8
12章	アランは、10章の出会いで、ジェルメーヌ・ルメールに軽蔑されたと考えていたが、彼女の取巻きの1人との対話から、笑いものにされていなかったことを知る。しかしこの対話で、彼女の欠点を口に出してみたことによって、アランの中に批判の目があることがわかる。	X-7
13章	ジェルメーヌ・ルメールが取巻きたちを好む性格の中に、自己陶醉があることを、彼女自身の sous conversation によって示す。アランが彼女との関係を気にしていることを知り、自分の影響力の大きさを自覚する。	X-6
14章	ジェルメーヌ・ルメールと取巻きがアランの家を訪門、関係は不変	X-6
20章	アラン、指導教授との対話で、ジェルメーヌ・ルメールが自分たちとは別の交際をもっていること、そこでは、自分たちの女王が身を低めていることを知る。	X-5

21章	アランは新しい住居にジェルメーヌ・ルメールを迎えている。美や人間に対する評価のちがいがから、彼女がいわば自己満足の種類からアランの出入りを許していたことを覚り、アランは不意に自分の描いていた宇宙が影にすぎないことを知る。こうして、ジェルメーヌ・ルメールとの関係の現実が急に現われる。	X
-----	---	---

1つ1つの会話を詳しく書くことはできなかったが、大雑把にいつてこのように図式化できるこの経過は、凡て前章での会話が次の会話を導き、次の会話が前章での意味を明らかにしてゆくという方法で、会話者同志の真の関係を、後から後からとあばいてゆく、という構成になっている。例えば、表Ⅲでは6章、12章などに1部分現われている、一種の謎ときの方法を持っている。そしてこの構成は、以上にあげた2つの例に限らず、どのテーマ、どの会話者をとりあげても同じである。

しかも、この真実の怖い関係（幻影が徐々に剝奪されてそれに至るという意味での真の関係）は、それ自身、固定した確かなものでなく、他の多数の関係によって影響され、相互にそれぞれの関係を変化させ、立体的に絡み合っている。どれをとっても同じであるが、上の2例をとりあげて一瞥してみよう。まず、アランとジェルメーヌ・ルメールとの会話の話題には、殆んど常に伯母の住居のことが現われる（5章、14章、21章）、一方、伯母の家をほしいというアランの気持の中には、常に、狭い家に対するひげ目と、友人を招待するという目的が存在する。《でもここは本当に狭くて…でも、もうすぐ引越すのです》（14章P. 173）、《お祭りさ、ジゼル、皆とっても喜こんで馳せ参じるよ、宴会だ宴会だ、皆さん》（8章P. 111）また、ジェルメーヌ・ルメールは、住居が手に入ったら、家具をととのえるのを手伝ってあげる、たのしみにしていると申し出る（14章P. 175）。

こうして相互に錯綜し、結ばれ、影響し合う多数の関係が、これまた多くの会話者たちの無数の会話によって動き、ゆらめきながら、読者の前に展開されてゆくのである。

## 2

以上、会話に観点を置いて、この小説の複雑な構成に一つの形を仮定し

てみたが、この構成は、一体何を現わしているのだろうか、この形式は、どんな考を反映しているのだろうか。この答を出す第1段階として、会話が、他の会話に影響し、関係が、他の関係を左右することを、最も単純な段階で捉え最も基本的な形で証明してみよう。つまり、この章では、何でもない他人のひと言が、如何に、人物の心の中に沈みこみ、澱となって残るかを証明したいと考える。

まず最初に、明確な手がかりとして、この小説で、人物の心の内側の描写の中に、明らかに会話でないのに、《 》をつけられた言葉が存在することに注目したい。断っておかなければならないが、人物の想像した場面や、追憶した場面に、会話が存在することは、確である。これは、「サロートの小説では、想像の場面が、他の残り全部と同じ繊維でできている。」<sup>(8)</sup>という批評通り、表面に出た会話と同じに扱ってよいであろう。

しかし上に注目した《 》は、会話でなく、当然ちがった符号をつけてもよい言葉なのである。普通は会話を意味する同じ符号をそれにつけたということは、何を示すのだろうか？ Benveniste は、記号は、くり返されることによって記号になると言っているが、<sup>(9)</sup> この符号の示すことを調べてみるのが、問題に近づく1歩になると思われる。

さて、このような符号をつけられた言葉は、全部で18ヶ所にあり、すべて、人物の追憶または想像の場面である。

その働きを順に見てゆくと、

1) 先ず、その少し前に言われた会話の中のひと言が、人物の心に残って、波紋を生じている場合がある。

例えば、14章で、アランは、ジェルメーヌ・ルメールと取巻きの客を前にして、自分の仕事机が何故壁に向いているかを説明している。ふと、《その方が便利で》という。この便利という言葉が、アランの心の中で反芻される。「よし、恰度いい動きた。《便利》はよかった。いい具合に謙虚だし、何気なくて…。」(P. 169) この場合、自分の言ったひと言を、吟味し重視

し、反復する時、アランの心の中でそれは、発音された時の声音と共に鳴りひびいているであろう。

これが、悪意ある他人の言葉の中の一言であれば、その強度は1 そう大きい筈である。ジェルメーヌ・ルメールは、アランに本屋で出会い、その父に紹介される。アランの才能を賞めた彼女に、父は、《無論、この子のことは誇に思っていますよ。では、我国の大批評家にでもなりますかな、未来のサント・ブーヴですか》とせせら笑う(10章P. 126)。その3章後ジェルメーヌ・ルメールの心に、この言葉が思い出される。《未来のわれらがサント・ブーヴ…》あの皮肉な微笑…。(13章P. 163) おそらく顔の表情と共に、その声音その調子も、心に深く沈みこんでいたにちがいない

2) 更にもっと強く、意識を占領している人物の、いつものいいぐさがある。対抗的な気持を伴って、くり返し意識にのぼってくる言葉であろう

アランの妻の母は、自分でも疚しいと感じる支配欲が起ると、いつもアランの言う、人の心の奥の泥、《小さな沼地》(3章P. 44) という観念が意識をかすめる。唯の一言だが、それは娘婿の考え方、人間観のすべてを代表している。ほら、誰でも人に知られたくない心の片すみを持っている。「彼は、他人の心を暴き、純粹だった娘の心に批判を持たせた。」(同)彼女はこうして、いつも娘夫婦の批判を心に深く意識する。《おせっかい婆さん》(3章P. 47) これも2人の常套文句で、喜劇の継母役をいやというほど、意識させられるのである。他人の自分に対する評価をいつも意識するのは、辛いことである。だが、時にそれはこのような一言となって心に残り、一瞬の間にも脳裏をよぎるほどになる。

3) 時には、それは、2) の場合ほど、具体的な発言者を持たず、いつも誰かからきいていた言葉となって残っていることもある。19章でアランの父は、姉のベルトが、持株の判断のことになれば、女性らしく気分を左右されたりせず、冷静で、慎重で、欺されたりしないのを見ぬいて心に言う。「そのことにかけては、もう《のぼせ》もなければ、慄えもない。よう

く知っていて、多分もう決定も下しているのだ。」(P. 225) 一般的な言葉だが、妹もよく口にしていたのであろう。

4) また、何でもない呼名だが、遠い昔の追憶の中にかえって来て、2人の関係を照らし出すものもある。18章の始め、アランに追い出されそうになったベルト伯母は、この事実が信じ難い。「あのかわいい小さな少年が、私の小さなアランが、彼の《おばぢゃま》にそんなことをするなんて。」(P. 200) 長い、人と人との関係の中の重い呼び方である。

5) 生涯の重要な言葉も、人の心に重く残る。ジゼルの婚礼の日の思い出、すべてが幸福に溢れて文句のつけようもなかった。「一寸ばかり彼女が市長に向って早く言いすぎた、あの《はい》も、指輪を受けるために、左手の代りに出した右手も。」(4章P. 51)

6) また、他人の評価も、深く心に残って、ふとした折に思い出され、自分の評価に重なり、ときに、自分の判断を形ずくる。ベルトは、アランたちの使として、のこのこ出かけて来た弟を見ながら、幼い時の彼に対する大人たちの評価を思い出す。「何かしら、陰険な、偽善的なものが、彼の唇のしわの中で形づくられ、流れるようにあごの線にそって滑っていった。《ピエールは腹黒い。》彼がまだ5, 6才のころ、2人を教えてくれていた年とった英国婦人が、友人に洩らしたことがあった。司祭を嫌っていたお祖母さまは、彼のことを《小坊主さん》と綽名していたっけ…。」(15章P. 177)

以上のように《 》で囲まれたひと言を点検してみると、何れの場合も。それは、現実に聞えてくる会話と同じほどの強さで、心の中に繰返される重いひと言であることがわかる。曾ての会話が、その言葉に集約されて、残ったとも言えるし、絶えず頭の中に繰返し再成される点で、映画のフィルムのようなとも言えるだろう。このひと言は、言われた時の声音や雰囲気までも伴って、澱のように人の心の中に沈澱している。そして、それが人物に対する、時には自分に対する評価である場合も多く、それはまた、

人と人との関係の中で追憶され、類似点を拡大し、敵意を増幅し、変化やゆらめきを与えてゆくのである。

このような言葉のさまざまな場合を調べることによって、人と人との関係の中で、言葉がどんなに大きな役割を果しているかが明らかになったと思われる。

他人のひと言だけではない。この小説の中で、他人の評価が、人の心にどのような微妙な影を与えるかを、写し出した見事な場面を、われわれはいくつも見出すことができる。ジゼルは、アランの評価に従って、実の母を見るようになり、また、母の評価でアランを見る。アランが、指導教授の評価で、ジェルメヌ・ルメールとの関係にどんな影響をうけたかは、先に述べた。注目すべき点は、その場合、これらの評価が、すべて会話の形で、心の中に残り、意識の中に浮び上がってくることである。例えば、ジゼルが舅に会いにゆく場面で、浮び上がって来るのは、舅についての女性たちの評価である。「《あんたのお義父さん、魅力があるわね。…そう思わない？ 私わかんないけれど何かいいわね。…あの人とっても誘惑的だと思うわ。ああ、昔はきっと、もてたでしょうね》彼女たちがジゼルに言うことが、彼女は嫌で、頑<sup>かた</sup>くなになる。《ええ、義父<sup>おぢ</sup>は、魅力的ですわ。私とても好きですわ。ええ、いい方よ。アランは父親似だと思うわ》彼女たちが、わざとしたのぢゃないけれど、火傷させたところを、その上をそっと吹いてくればいいのか。そしたら痛みはとまるのに。…肯いて、肯定してくればいいのか…。」(9章P. 112) こうして、ジゼルの、義父に対する微妙な心は、まず、他人との会話の追憶から始まるし、また、その会話での、ジゼルの反応を描くことによって、彼女の気持を描き出すのに役立っている。人間の脳裏で絶えずくり返される他人との会話—その意味で、人間の意識はすでに社会化されているといえるのだが—この大きなテーマにサロートは着目し、十分に描き出したと言えるだろう。20章の始めで、美術品を買おうとしているアランの描写は、典型的にこのことを示している。「何

と優雅な美しさだろう。何という力、何という慎しさ、息ずいているようだ。生きてるみたいだ…《本当に美しいですね。ねえ全く驚きますね。どこで見つけたんです？ 全くの掘出しものですね。》彼らは、すっかり興奮してまわりをまわるだろう。…彼は、謙虚に目をふせるだろう。《いえ、偶然見つかったんですよ。散歩の途中で、小さな古道具屋のショーウィンドウで見かけましてね》。(P. 229) といった空想の問答が2頁も続く。こうしてすべての行動決定に際して他人の言葉を思い浮べずには、いられないのである。

以上のように小説全体の構成の分析と、人物のいわゆる *sous conversation* の中にある《 》の意味を検討してみて、いくらかこの小説の形式の示しているところに近ずき得たように思われる。人物の関係を、立体的に絡み合わせて描いたというのは、それらの関係が、それぞれ他の、さまざまな関係によって左右され、変化せざるを得ないからである。それは何故かといえば、人間は、他人の評価で（相手の自分に対する、また他の人の相手に対する評価など）頭を一杯にしなが、生きているからである<sup>(10)</sup>。気に入った美術品を買うという行動についてさえ、頭の中に他人との会話が渦巻くという存在なのである。このような存在の、内側の動きと、会話のあらゆる陰影を捉えて、サロートは、そのゆらめく変化を実現したのである。<sup>(11)</sup>

その場合、この小説は、最初に明確な1つの関係を捉えて、その関係が変化してゆくさまを順に追うという構成をとらなかった。反対に、一見存在しているかに見えた明確な関係（血縁者の中の親愛な関係や、好意をもち合っている人間関係）が、次々と否定され、別な姿を現わすという逆の構成をとっている。しかも、その最後に、真の姿が現われるわけではない。小説全体が、それへの無限の接近にすぎず、これだと、はっきり名指せるものは何もないのである。こうして、すべてを暴きながら、捉えようとした、人間の真の内容とは、空虚かも知れない。見出された本当の関係とは

無関係の関係かも知れない。円天井にうつった星座の影のように、人々は空しい関係を求め、空しい他人の評価を追い続けて、ぐるぐると回るのみである。これらの作中人物の示す動きは、サロートがドストエフスキーの人物を駆りたてている秘かな衝動について述べた言葉を思わせる。「ドストエフスキーの全作品の中で、数限りない多様なシチュエーションを通じて、この態度が繰返されているので、彼の作品は一寸単調だと非難できる位だ。と彼女は指摘し、彼の作品の構造をなす凡ての線が、交錯しながら、唯一つ志向している「この出会いの場所」を定義しようと試み、最後に Katherine Mansfield の言葉を借りて、「他人との間に接触を確立したいというこの烈しい望み。」と言う (*l'ère du soupçon*, p. 41—43)。「他人との接触、不可能な、だが心を静めてくれるような絆を求める、やむことのない、殆んど偏執のような欲求」<sup>(12)</sup>につき動かされて、サロートの人物もまた、虚しい星のように瞬いている。ただ1つ確実な、空虚に向って、次々と皮を剥いで、無限の接近を演出するという小説の形式は、こうしてまさしくこのような思考にぴったりのものだったと言えるだろう。

だがこの小さな、影の星空の外には、厳然たる宇宙が存在するのではないだろうか？ それは例えば死との関係といった確実な関係であり、会話の言葉も、内なる声も、もう何の意味もない関係なのではないだろうか。とび交う無数の会話、捉えたと思えばちがった面をみせる多数の人間関係の模様の背後に、気配のように感じられる真の宇宙の存在を、この小説は示峻しているように思われる。その実体を、サロートの他の作品を通じてたずねることを次の課題にしたい。

#### 註 の 部

- (1) A. S. Newman: *Une Poésie des Discours*, Genève, 1976 は Sarraute の全作品について、形式の総括的な統計や分類に成功している。
- (2) H. Lefebvre: *Pascal*, tome I, 1949, Paris, p. 13 sqq.
- (3) *Op. cit.* p. 8
- (4) Sarraute において、これは、Jakobson の定義する *monologue intérieur* では

ない。《Il y a des monologues intérieurs chez moi, mais ils sont plutôt rares》と作者自身が言っている (KNAPP, B. L.: 《Document: interview avec N. Sarraute》 in Newman, *op. cit.*, p. 112) なお、このような観点での、小説と劇の比較は面白い問題であろう。Genette は、アリストテレスによって劇が小説に優位する要因がつけられたこと、monologue は内的なものでなく、主人公の独白ととってよいと示唆している。Figure, III, p. 192-3.

- (5) Sarraute 自身はこれらを sous conversation とよぶ。N. Sarraute: *Conversation et sous-conversation* 参照 (*L'ère des soupçons*, Gallimard, 1968, p. 95-147.
- (6) F. Calin: *Nathalie Sarraute, lettres modernes*, 1976, p. 70-76.
- (7) Roudiez はこれを Gisèle の母ととり、M. Cranaki et Y. Belaval は、Gisèle の母は名を与えられないとしている (Newman. *op. cit.*, p. 79).
- (8) C. Audry: *Communication et reconnaissance, Critique*, janvier, 1954, p. 18, in Newman, *op. cit.*, p. 102.
- (9) E. Benvenist: *Problème de linguistique, générale*, p. 49-55.
- (10) G. Zeltuer は Sarraute の作中人物について、「心の中に起るすべてのことが、自分についての最もよいイメージをおしつけようとして相手の方へ向っている。その意味で、社会化されたやり方で皆が思考する。」と評している。(《*Nathalie Sarraute*》, *Mercure de France*, Août 1962, p. 594.
- (11) この作品が現われた時、G. Picon は、これを作者の最高傑作であるばかりでなく、現代小説の中でも滅多にない成功作だと賞讃している (*Lettres. Actualité, Le Planétarium. Mercure de France*, juillet, 1959, p. 491).
- (12) N. Sarraute: *De Dostoïevski à Kafka*, (*L'ère du soupçon*, Gallimard, 1968, p. 43).